

大学生の「ボランティア」に対する認識 —医療福祉を学ぶ大学生を対象とした調査から—

荒川裕美子*1 吉田浩子*2 保住芳美*2

はじめに

我が国では、従来「ボランティア」は「主体性・社会性・無償性・先駆性に基づく活動である」と説明された¹⁾。しかし、1980年以降「ボランティア」は『小さな親切』など単発的で軽い活動もボランティアにカウントされ、さらにそのボランティアが『組織化』されて人々の目に見える形で活動を展開するようになった²⁾とされ、厚生労働省によるボランティア政策には、「サービスとしてのボランティア」から「ライフサイクルとしてのボランティア」へという変化が示されている³⁾。「ボランティア」は、「青少年や成人が生きがいをもって、充実感をもって生きていくための社会参加の機会の拡大」として用いられる一方で、「児童・生徒のボランティア精神の涵養」⁴⁾のような教育的意義が求められるようになったのである。

実際、教育の現場では、2002年度より小・中学校に「生きる力」の育成を目指した「総合的な学習の時間」が本格的に実施されるようになった（高等学校では2003年度より完全実施⁵⁾）。この「総合的な学習の時間」における具体的な実践内容として、「ボランティア活動体験」が多く導入されており、小・中・高等学校の授業の一環として「ボランティア活動」や「奉仕活動」等の体験学習の推進が図られている。

このように、政府によって我が国の将来を担う若者の世代の教育の一環として「ボランティア」が利用され始めたことから、よりいっそう「ボランティア活動」が普及されるのではないかと思われた。しかし総務省統計局が行った「平成18年社会生活基本調査」⁶⁾によると、1年間に「ボランティア活動」を行った人数の割合は、調査対象者全体の26.2%で、5年前の2001年の調査より2.7ポイント低下していた。年齢階級別にみると、特に20歳代の若者におけ

る「ボランティア活動」を行った人数の割合が、他の世代に比べ低く、調査対象者全体の2割に満たなかった。教育分野にまで「ボランティア活動体験」が積極的に導入されたにも関わらず、なぜ「ボランティア活動者」は減少傾向にあるのだろうか。

この「平成18年社会生活基本調査」における、20歳代の若者の中には、大学生が含まれる。現在の大学生の多くは、「総合的な学習の時間」が本格的に実施された当時、中・高校生であったと推測される。「ボランティア」の定義や意義づけが混沌としている中、彼らは「ボランティア」をどのように認識しているのだろうか。

これら大学生を対象とした研究には、「ボランティア活動」に参加した動機やきっかけや、「ボランティア」に対するイメージから調査対象者が「ボランティア」をどう捉えているかを分析、解釈したものがある^{3,7-9)}。小澤¹⁰⁾は、「ある対象や人物に一旦付着したイメージは、われわれの行動選択の場面で、大きな影響力をもつ」として、「ボランティア」に対するイメージを調査することの重要性を指摘した。この「ボランティア」に対するイメージについては、「まじめな」、「責任感のある」などの形容詞を用いることによって「ボランティア」のイメージの特徴を明らかにした研究がある¹¹⁻¹⁴⁾。新出ら¹⁵⁾は、「ボランティア活動」に対するイメージの測定を試みることで、「ボランティア活動」に対する認識や態度などを捉えることができることを明らかにした。しかし、調査対象者自身が具体的にどのような行為を「ボランティア」であるとみなすか、といった、「ボランティア」という言葉と具体的な行為を結びつけて、「ボランティア」に対する認識を実証的・定量的に調査された研究はみられなかった。次世代を担う若い世代の「ボランティア活動」のさらなる充実を測ることを目的とした知見を得るためには、その第一歩として、「ボランティア」に対する認識を明らか

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 荒川裕美子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail: w7108001@std.kawasaki-m.ac.jp

にすることが重要であると考える。

そこで本稿では、若い世代の「ボランティア」に対する認識に関する、実証的な手がかりを得ることを目的に、その一助として、「総合的な学習の時間」が本格的に実施された当時、中学生であったと推測される、医療福祉系大学の1年生(当時)を対象に集合調査を実施した。

本研究では、調査対象者の「ボランティア」に対する認識を把握するために、「どのような行為を「ボランティア」と認識しているか(以下、「ボランティア」とみなす行為と省略する)」及び、「『ボランティア』に対するイメージ」の2つの側面を指標として用いた。

また、本稿では、小・中・高等学校時代の学校の授業の一環として行なわれる「ボランティア活動」を「ボランティア活動体験」と呼び、学校の授業以外で行なわれた「ボランティア活動」と区別して用いる。

方 法

1. 調査対象および調査方法

本調査では、医療福祉系大学生の「ボランティア」に対する認識と、小・中・高等学校時代における「ボランティア活動体験」との関連について知ることを目的に、小・中・高等学校に授業の一環として「ボランティア活動体験」が導入された当時、中学生であったと推定される、医療福祉系A大学の1年次生を対象に、2006年7月と9月に、許可を得られた講義の受講生を対象に集合調査を実施した。その際「この調査によって得られたデータは全て統計的に処理され、本研究以外の目的に使用されることは一切ありません。また、答えたくない質問に答える必要はありません。」と教示した。質問用紙は配布許可が得られた講義の開始時に配布し、講義終了後に回収した。

回収した質問紙780枚のうち、計716人の回答を解析の対象とした(有効回答率92%)。

2. 調査内容

調査内容は、①小・中・高等学校の授業の一環における「ボランティア活動体験」の実際、②調査対象者が「ボランティア」とみなす行為、③調査対象者の「ボランティア」に対するイメージの3点であった。「ボランティア」とみなす行為に関しては、2007年4月に実施した予備調査でインターネットや資料等で「ボランティア」であると示されている行為32項目の中から「ボランティアだと思ふ行為」全てを選択させた。この予備調査結果をもとに、各質問項目を選択した人数の割合が5%以下であった項目を

省き、本調査では、合計22項目の行為¹⁶⁻²²⁾を提示した。また、「ボランティア」に対するイメージに関しては、筆者らが2004年に大学生を対象に実施した調査で用いた、総務庁青少年対策本部による「青少年のボランティア活動に関する調査」(1993年)¹⁴⁾を参考に作成した「ボランティア」に対するイメージ項目²³⁾を改変したものを使用した。

3. 分析方法

得られた結果をまず、「ボランティア」とみなす行為と「ボランティア」に対するイメージにおいて、それぞれ主成分分析を用いて解析したが、各質問項目を選択した人数の定量的な格差が大きかったため、第1因子(主成分)に、一般因子が出るなど、明確な結果が得られなかった。そこで、クロス集計表を分析データとして標準化をはかり、周辺度数の要素のみを用いるコレスポネンス分析(対応分析)を用いることにした。

コレスポネンス分析とは、複数選択形式の質問で得られたデータ表の解析にも適用可能で、選択肢の分類や回答者の分析に活用することができる分析方法²⁴⁾で、クロス集計表の行と列の情報を2次元または3次元上の図に表現することを目的の1つとした手法であり、クロス集計表の詳細な分析に適している²⁴⁾。また、行要素と列要素の周辺度数を標準化するため、回答の出やすい項目と出にくい項目を同等に扱うことができる²⁵⁾。このため、本調査ではコレスポネンス分析が適していると判断した。統計処理にはSPSS VERSION11.5を使用した。

結 果

1. 小・中・高等学校における「ボランティア活動体験」の実際²⁶⁾

これらの詳細については、すでに別稿で示したので、ここでは「ボランティア」に対する認識を分析する際に必要となる項目のみ以下に示す。

調査対象者全体(716人)に、小・中・高等学校の授業の一環における「ボランティア活動体験」の経験の有無、「ボランティア活動体験」の具体的な内容、「ボランティア活動体験」に参加した理由について尋ねた。その結果、調査対象者全体(716人)の78%(555人)が、小・中・高等学校において「ボランティア活動を体験した」と回答した。これらの学生の45%(251人)は、小・中・高等学校すべての時期に「ボランティア活動体験」をしていた。

2. 調査対象者の「ボランティア」に対する認識

本研究では、「ボランティア」に対する認識を把握するために、「ボランティア」とみなす行為と「ボランティア」に対するイメージを2つの側面を指標と

して用いることを試みた。

2.1. 「ボランティア」とみなす行為

本調査対象者全体(716人)に、彼らが「ボランティア」とみなす行為について尋ね、その結果を表1に各項目を選択した人数を多い順に示した。調査対象者の60%以上が「ボランティアだと思う」と回答した行為は、「余っている鉛筆等を集め、アジアやアフリカなど海外の貧しい子どもたちに送る」(85%)、「災害にあった被災地へタオルなどの生活用品を提供する」(78%)であった。次いで「献血をする」(63%)、「コンビニに置いてある募金箱に募金をする」(61%)であった。60%以上の学生は「ボランティア」を「困っている人に対して余剰品の譲渡をすることである」と認識していることが示唆された。

これら「ボランティアだと思う行為」を、小・中・高等学校における「ボランティア活動体験」の有無で比較した。その結果、小・中・高等学校で「ボランティア活動体験」をした学生は、そうでない学生に比べ「余っている鉛筆等を集め、アジアやアフリカなど海外の子どもたちに送る」という項目のみ、

回答した人数の割合が有意に高かった($\chi^2 = 4.507$ $p < .05$)。

次に、これらの学生の「ボランティア」とみなされる行為に対する認識をさらに詳しく分析した。本研究では、本調査対象者が「ボランティア」とみなす行為を詳細に分析するため、コレスポネンズ分析を行い、22種類の「ボランティア」とみなす行為を、2次元に要約し、その結果を図1に示した(イナーシャ寄与率13.7%)。

図1の第1象限の領域には「災害にあった被災地へタオルなどの生活用品を提供する」、「余っている鉛筆等、文房具を集めアジアやアフリカなど海外の子どもたちに送る」、「学校の授業で施設に行きお手伝いをする」、「国体の運営の補助をする」、「小学生の登下校時の安全監視をする」行為がまとまりとして布置された。これらは、行為の対象が明確であることから、それらのカテゴリーを「行為の対象者が明確な行為」と解釈することができた。

図1の第2,3象限には「地球温暖化防止のため、冷房温度を28度に設定する」、「公園に落ちていた空

表1 「ボランティア」とみなす行為

	n	%
1. 余っている鉛筆等、文房具を集め、貧しい国の子どもたちに送る ¹⁾	611	85
2. 災害にあった被災地へタオルなどの生活用品を提供する	558	78
3. 献血をする	451	63
4. コンビニに置いてある募金箱に募金をする	438	61
5. 小学生の登下校の安全監視をする	425	59
6. 学校の授業で施設へ行き手伝いをする	412	58
7. 国体の運営を補助する	387	54
8. 自分の住んでいる地域の草刈りをする	349	49
9. 1クリックあたり1円を企業がクリックする人に代わってNPO 団体に募金してくれるサイトにアクセスし1クリックする	339	47
10. 車椅子に乗った人の電車の乗降を手伝う	310	43
11. 点字ブロックの上に置かれている自転車を退ける	293	41
12. 公園に落ちていたあき缶を拾いゴミ箱に捨てる	287	40
13. ほっとけない世界のまずしきキャンペーンで売っているホワイト バンドを購入し、「貧困をなくそう」という意思表示をする	278	39
14. 活動経費や多少の謝礼金を受け災害援助活動を行う	263	37
15. 月ごとの掃除当番が決められ無償で玄関や階段を掃除する	245	34
16. 学校で先生に言われ、書き損じはがきを集める	244	34
17. 松葉杖を使っている人のためにエレベーターのボタンを押す	236	33
18. 骨髄移植のドナーに登録する	232	32
19. けが人や急病人が出た時、介抱したり救急車を呼ぶ	135	19
20. バスや列車で立っている人に席を譲る	132	18
21. 何か探している人に声をかける	106	15
22. 地球温暖化防止のため、冷房温度を28度に保つ	88	12

1) 「ボランティア活動体験」のある学生とない学生で、この項目を選択した人数の割合に有意に差が見られた。

「ボランティア活動体験者」482人(79%)、「ボランティア活動未体験者」129人(21%)

$\chi^2 = 4.507$ $p < .05$

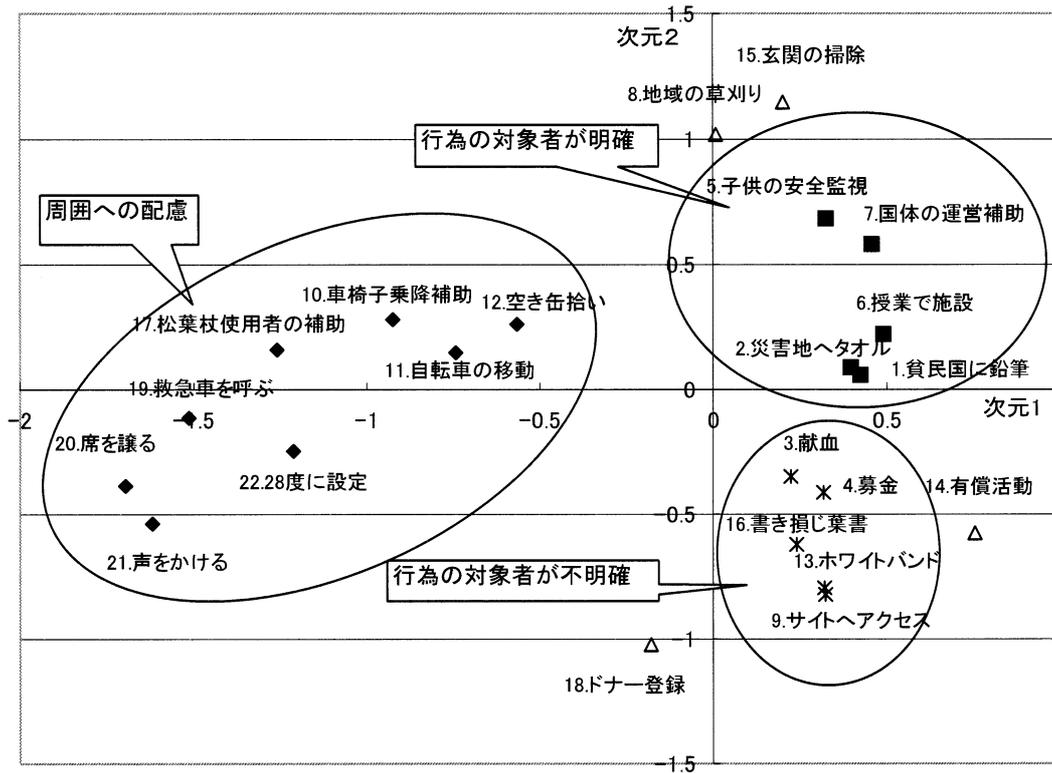


図1 「ボランティア」とみなす行為 (調査対象者全体)
 「ボランティア」とみなす行為22項目を対応分析を用いて2次元に要約した。その結果、本調査対象者が「ボランティア」とみなす行為は「1 行為の対象者が明確な行為」「2 行為の対象者が不明確な行為」「3 周囲への配慮」の3つに要約することができ、それぞれのまとまりとして布置された項目を「■」、「*」で示した。これら3つの解釈にあてはまらない項目は「△」で示した。

き缶を拾いゴミ箱に捨てる」、「点字ブロックの上に乗っている自転車を退ける」、「車いすにのった人の電車の乗り降りを手伝う」、「松葉杖を使っている人のためにエレベーターのボタンを押す」、「けが人や急病人が出た時、介抱したり救急車を呼んだりする」、「バスや列車で立っている人に席を譲る」、「何か探している人に声をかける」行為がまとまりとして布置された。これらの行為は、自分の周囲に対する思いやりの表出や道徳的行為であることから、それらのカテゴリーを「周囲への配慮」として解釈することができた。

図1の第4象限の領域には、「コンビニに置いてある募金箱に募金をする」、「献血をする」、「学校で先生に言われ、書き損じはがきを集めた(後から国際協力に使われることを知った)」、「ホワイトバンドを購入し、貧困撲滅の意思表示をする」、「1クリック1円のサイトにアクセスする」行為がまとまりとして布置された。これらは、行為の対象が誰であるか特定しづらいことから、それらのカテゴリーを「行為の対象者が不明確な行為」と解釈することができた。しかし「交通費や多少の謝礼金を受けて、災害援助活動を行う」、「骨髄移植のドナーに登録する」、

「自分が住む地域の草刈りをする」、「毎月1回、掃除当番が決められ、無償で玄関と階段の掃除をする」といった、これらの3つの解釈にはあてはまらない行為もみられた。以上のことから、本調査対象者の「ボランティア」に対する認識は多様であることがわかった。

さらに、彼らが「ボランティア」とみなす行為を、小・中・高等学校での「ボランティア活動体験」の有無別に対応分析を行い、詳しく解析した。その結果「ボランティア活動体験者」は、調査対象者全体の結果とほぼ同様であった(図2)。調査対象者全体の78%が「ボランティア活動体験者」であり、その傾向が同様であることは当然であると思われる。

それに対し「ボランティア活動未体験者」は、「毎月1回、掃除当番が決められ、無償で玄関と階段の掃除をする」、「交通費や多少の謝礼金を受けて、災害援助活動を行う」、「骨髄移植のドナーに登録する」といった3つの行為において、調査対象者全体や「ボランティア活動体験者」の結果と、座標上の位置が異なっていた(図3)。その他の行為に関しては、「ボランティア活動体験者」の結果とほぼ同様

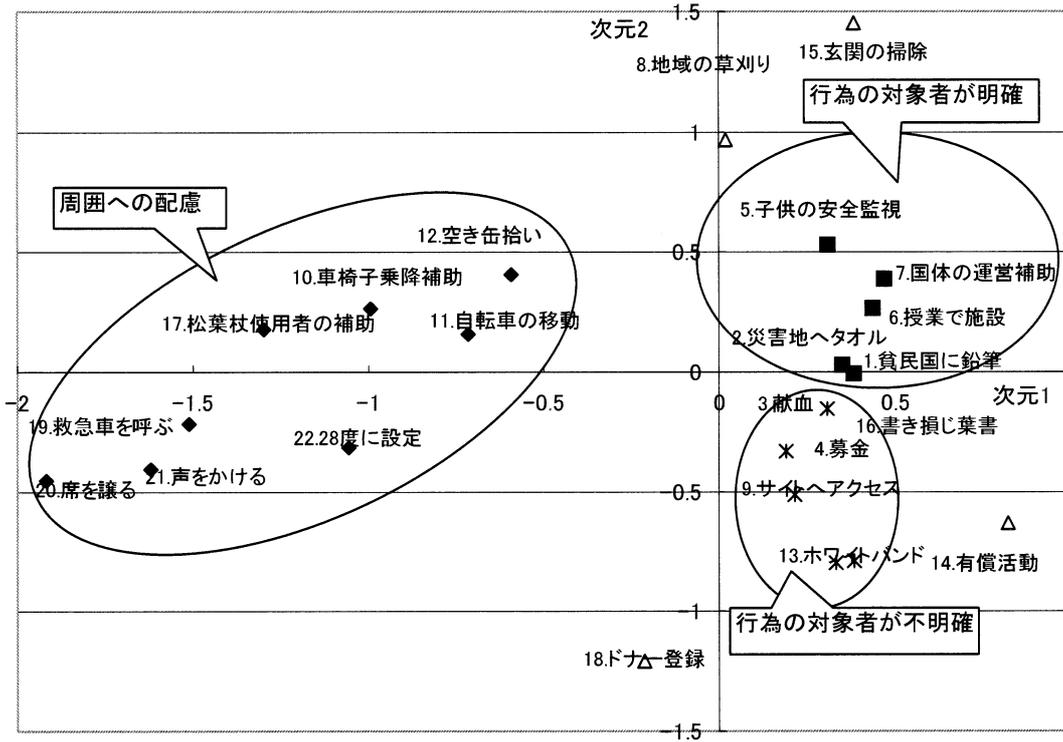


図2 「ボランティア」とみなす行為 (ボランティア活動体験者)

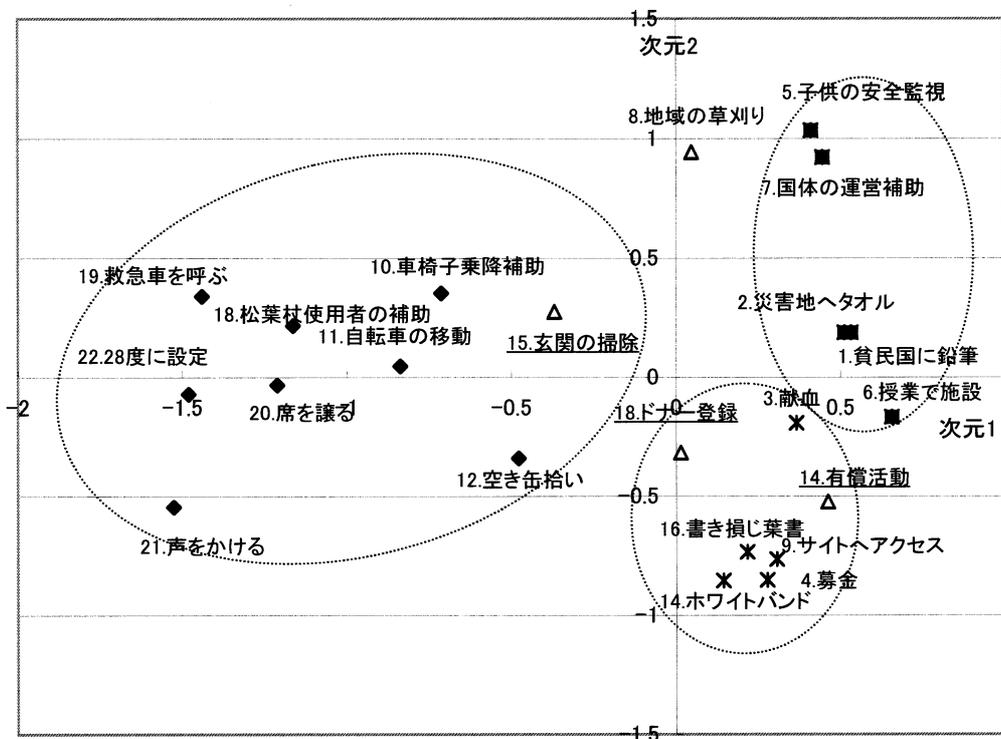


図3 「ボランティア」とみなす行為 (ボランティア活動未体験者)

調査対象者全体および「ボランティア活動体験者」で抽出された各まとまりを点線で囲んだ。各まとまりに、新たに加わった行為に下線を引いた。

であった。

2.2. 「ボランティア」に対するイメージ

調査対象者全体に、「ボランティア」に対するイメージとして「思いやり」、「自発性」など22項目の中からあてはまると思うもの全てを選択してもらった。その結果、716人中、67%が「思いやり」を選択し

表2 「ボランティア」に対するイメージ

	n	%
1. 思いやり	481	67
2. 奉仕活動	430	60
3. 自主性	380	53
4. 助け合いが必要	321	45
5. コミュニケーション能力が必要	299	42
6. 時間と労力が必要	279	39
7. 充実感	273	38
8. 精神的余裕が必要	271	38
9. 人脈が広がる	262	37
10. 責任感が必要	250	35
11. 見知らぬ人に対して行う	233	33
12. 継続が必要	199	28
13. 自己犠牲が必要	169	24
14. 自己満足	131	18
15. 気軽にできそう	111	16
16. 余暇活動	105	15
17. お金が必要	72	10
18. 国民の義務	67	9
19. 報酬があっても良い	65	9
20. 専門的知識が必要	64	9
21. 学校教育で行うべきではない	49	7
22. その他	6	1

た。次いで「奉仕活動」(60%)、「自主性」(53%)を選択した人数の割合が高かった(表2)。

これら「ボランティア」に対するイメージをさらに詳しく解析するため、コレスポネンス分析を実施した(図4)(イナーシャ寄与率19.1%)。その結果、「責任感が必要」、「継続が必要」、「専門的知識が必要」、「精神的余裕が必要」、「助け合いが必要」、「コミュニケーション能力が必要」、「お金が必要」といった項目が近くに布置され、本調査対象者の「ボランティア」に対するイメージには「ボランティア活動(あるいは活動者)に求められる事柄」が含まれていることがわかった。その他の項目においては、1つの概念のまとまりとして解釈することができなかった。

考 察

調査対象者全体(716人)の78%が小・中・高等学校の授業の一環として「ボランティア活動体験」をしていた。また、調査対象者全体の60%以上が、困っている人に余剰品を譲渡することを「ボランティア」と捉える傾向が強いことがわかった。「ボランティア」は「困っている人を助けてあげること」だと思っている人が多いといわれている²⁷⁾が、本調査対象者に関しては、この「助ける」ための方法が「自分がいらぬ物(余剰品)をあげること」であると捉えていると思われた。このことから、もし、彼

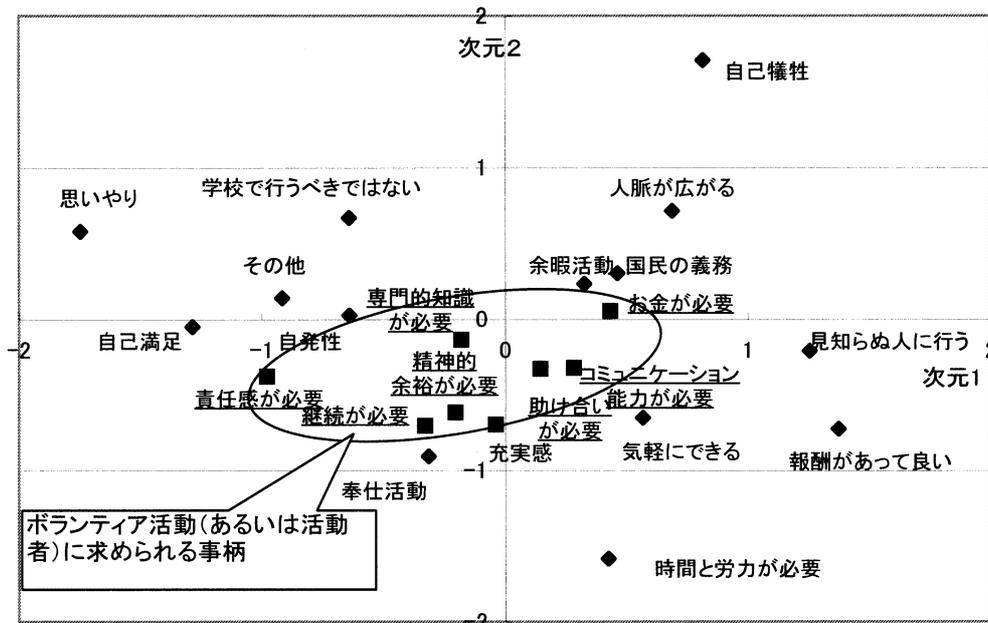


図4 「ボランティア」に対するイメージ
「ボランティア」に対するイメージ22項目をコレスポネンス分析を用いて2次元に要約した。その結果、本調査対象者の「ボランティア」に対するイメージには「ボランティア活動(あるいは活動者)に求められる事柄」が含まれており、そのようにまとめることができた項目を、その他の項目をで示した。

らが、学校の授業を通して「ボランティアとは困っている人に自分の余剰品を提供することである」と学習したのであるとすれば、今後「ボランティア教育」のより良いあり方についても検討する必要があるだろう。

さらに、「ボランティア活動体験」の有無によって、「ボランティア」とみなされる行為の認識が若干異なっていたが、「ボランティア活動体験者」と「ボランティア活動未体験者」のどちらの「ボランティア」とみなされる行為も、多様で曖昧であった。このことから、小・中・高等学校における「ボランティア活動体験」と、「ボランティア」とみなされる行為の認識に明確な関連はないことが推測された。ただし、小・中・高等学校における「ボランティア活動体験」の積極的な導入は、わずか5年前に始まったばかりであるため、このことを評価することはあまりにも早いかもしれない。

また、本調査における「ボランティア」のイメージの中には、例えば「責任感が必要」や「継続が必要」など、「ボランティアをする人」に対するイメージと、「見知らぬ人に行う」や「学校教育で行うべきでない」など「ボランティア」と呼ばれる行為そのものに対するイメージが含まれており、このことが、本調査対象者の「ボランティア」に対するイメージの曖昧さに繋がった可能性が示唆された。先行研究では、大学生の特徴として「ボランティア活動」について明確なイメージをもっていないことが明らかにされており²⁸⁾、「ボランティア活動」と「ボランティア活動者」に対する、それぞれのイメージを調べることで、さらに具体的なイメージのまとまりが抽出されると思われる、これについては今後の課題である。

なぜ、本調査対象者全体の傾向として「ボランティア」に対する認識が多様で曖昧なのだろうか。序論で述べたように、現在の「ボランティア」には「小さな親切」とよばれる行動も含まれ、多様化している。このことも、本調査対象者の「ボランティア」に対する認識の拡大、多様化と関連すると思われる。

個々の「ボランティア」に対する認識が多様で曖昧であることは、我が国の社会に対してどのような意味をもつのだろうか。例えば、気軽にできる、ちょっとした親切行動を「ボランティア」として捉えることで、「ボランティア」を身近に感じ、「ボラ

ンティア」をはじめのきっかけに繋がるかもしれない。これは、「ボランティア」に対する認識の多様性と曖昧さがもたらす良い点といえるかもしれない。

その一方で、「交通費や食事などの活動経費、または多少の謝礼金や時給を受けて、災害援助活動を行う」活動は「有償ボランティア」と呼ばれ、対価が支払われる行為も「ボランティア」として捉えられている。その「有償ボランティア」に対する法人課税の是非をめぐって裁判が行われる、といった事態も起こっている²⁹⁾。これは「ボランティア」に対する認識が多様で曖昧であることが引き起こした問題の1つといえるかもしれない。このように、「ボランティア」に対する認識の多様さと曖昧さと、現実には起きている事象の関連は、今後検証していく必要があるだろう。

さらに、本調査対象者は、医療福祉系大学の大学生のみを対象としており、我が国の大学生の「ボランティア」に対する認識を把握するためには、他大学の学生の傾向についても調査する必要があると思われる。

結 論

若い世代の「ボランティア」に対する認識に関する実証的な手がかりを得ることを目的に、小・中・高等学校時代の学校の授業の一環としての「ボランティア活動体験」の実際、「ボランティア」に対する認識について質問紙を用いて集合調査を実施した。その結果、「ボランティア」とみなす行為と「ボランティア」に対するイメージの2つの側面を指標とした、調査対象者の「ボランティア」に対する認識は多様で曖昧であることが明らかとなった。「ボランティア」に対するイメージについては、「ボランティアをする人」に対するイメージと「ボランティア」と呼ばれる行為そのものに対するイメージが混在し、本調査対象者の抱く「ボランティア」に対するイメージの曖昧さに繋がった可能性が示唆された。本研究から、現代の若い世代における「ボランティア」に対する認識の一端を客観的、実証的に示すことができたと考える。今後、次世代を担う若い世代の「ボランティア活動」のさらなる充実に繋がる知見を得るために、他大学の学生や、大学生以外の若者の「ボランティア」に対する認識についても調査を実施していきたい。

文 献

- 1) 池田幸也：現代ボランティア論。初版，久美株式会社，京都，16，2006。
- 2) 中山淳雄：ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～。初版，三重大学出版会，三重，229-230，2007。

- 3) 橋本鉦市・石井美和：ボランティアと自己実現の社会学 その接合にみる言説・政策・理論・個人 . 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 53(1), 87-118, 2004 .
- 4) 文部省：中学校学習指導要領, 1998 .(<http://www.mext.go.jp/>)
- 5) 嶋野道広：ボランティア体験学習が児童・生徒の主体性を育む．初版，東京ボランティア・市民活動センター，東京，23，2000 .
- 6) 総務省統計局 平成18年社会生活基本調査 . 2007 .(<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/pdf/youyaku.pdf>)
- 7) 仁平典宏：戦後日本における「ボランティア」言説の転換過程—「人間形成レトリック」と、<主体>の位置に注目して— . 年報社会学論集, 15, 69-81, 2002 .
- 8) 柴崎あい：ボランティア観とボランティア活動の関連性についての調査研究 . 教育学研究紀要(中国四国教育学会), 43(1), 279-284, 1997 .
- 9) 森重拓三・小澤亘：現代青年の社会参加活動に関する意識調査の意義：動機の社会的分析の観点から . 9, 81-91, 1997 .
- 10) 小澤亘：「ボランティア」の文化社会学 . 初版，世界思想社，京都，ii，2001 .
- 11) 伊藤一統：青少年のボランティアに関するイメージと経験についての調査研究 . 教育学研究紀要(中国四国教育学会), 48(1), 336-341, 2002 .
- 12) 山村豊・梶原隆之・山岸裕美子：ボランティア教育のボランティア・イメージに及ぼす影響について . 介護福祉教育, 11(1), 80-84, 2005 .
- 13) 池田幸成：子どもたちの参画を育むために—ボランティア体験のデータをよむ— . ボランティア白書2003, 初版，社団法人日本青年奉仕協会(JAVA), 東京, 31-40, 2003 .
- 14) 総務庁青少年対策本部：青少年のボランティア活動に関する意識調査? 青少年とボランティア活動 . 青少年問題研究会, 41(10), 50-56, 1994 .
- 15) 新出昌明・斎藤隆志・川崎登志喜：長野オリンピックにおけるボランティアのイメージ 分析：スポーツ経営学的視点から . 東海大学紀要, 28, 21-30, 1998 .
- 16) 社団法人公共広告機構：2001年度作品, 2001 .(<http://www.ad-c.or.jp/campaign/work/2001/index.html>)
- 17) 株式会社ディ・エフ・エフ：クリック募金, 2001 .(http://www.dff.jp/click_top.html)
- 18) 藤原久礼：守本知美・河内昌彦・立石宏昭編，ボランティアのすすめ—基礎から実践まで— . 初版，ミネルヴァ書房，京都，33，2005 .
- 19) NPO 法人ほっとけない世界のまずしさ：ほっとけない世界のまずしさキャンペーン . 2005 .(<http://www.whiteband.org/>)
- 20) 全国社会福祉協議会・地域福祉推進委員会：ボランティアの基礎知識, 2006 .(http://www3.shakyo.or.jp/gogoV/kisotisiki/kiso_r.html)
- 21) オーダーチーズ：骨髄バンク・ドナーの輪, 2003 .(<http://www.donor-no-wa.com/>)
- 22) 菊池章夫：心理測定尺度集2 . 吉田富二雄編，初版，サイエンス社，東京，178-182，2001 .
- 23) 荒川裕美子・吉田浩子・保住芳美：小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連 . 川崎医療福祉学会誌, 16(1), 133-139, 2006 .
- 24) 内田治：すぐわかる SPSS によるアンケートの相関分析 . 初版，東京図書株式会社，東京，IV，2006 .
- 25) 君山由良：相関分析と因子分析によるイメージの測定法(統計解説書シリーズ J-17) . 初版，データ分析研究所，東京，11，2002 .
- 26) Arakawa Y, Yoshida H and Hozumi Y: The Views of 'volunteer' of Japanese University Students . *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, 13(1), 31-39, 2007 .
- 27) 金子郁容：ボランティアもうひとつの情報社会 . 第35版，岩波書店，東京，2，2005 .
- 28) 佐々木正道：大学生とボランティアに関する実証的研究 . 初版，ミネルヴァ書房，京都，253，2003 .
- 29) インターネット新聞 JANJAN, 流山裁判の控訴審 5日に第1回口頭弁論, 2004 .(<http://www.janjan.jp/janjan.html>)

(平成20年6月10日受理)

**A Study of Understanding 'Volunteer' to Japanese University Students
— Analysis of Questioner Survey Toward Students —**

Yumiko ARAKAWA, Hiroko YOSHIDA and Yoshimi HOZUMI

(Accepted Jun. 10, 2008)

Key words : understanding of 'volunteer', image of 'volunteer', volunteer activity,
university students

Correspondence to : Yumiko ARAKAWA Doctoral Program in Social Work
Graduate School of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: w7108001@std.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.18, No.1, 2008 203-211)